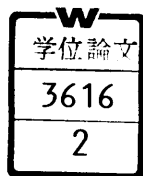


早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨

3616-2



博士（人間科学）学位論文 概要書

近代日本における民衆生活と身体

2003年7月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

小堀 哲郎

研究指導教員： 嵯峨座 晴夫 教授

現代の私たちの生活や身体のあるべき基盤は、いつごろ形成されたのだろうか。こうした問いを発するとき、私たちの目は「近代」へと向けられる。これは基本的には誤った認識の仕方ではない。現在の私たちの生活様式や身のこなしの多くの部分は、明治期以降の日本の近代化との連続性の中に求めることができると考えられる。ただし、それをあまりに単純に理解してしまうと、私たち自身が自分の生活や身体に対して持っている実感からかえって遠のいてしまうだろう。

このところ日本の近代や近代化のとらえ直しの作業が進んでいる。それは身体をめぐる近代化の議論の中でも同様である。軍隊や学校といった対象のさらに細部に分け入り、濃密な記述がなされているのは事実だが、身体近代化が一枚岩的に捉えられているという印象は否めない。

たとえば、次のような視点がある。軍隊や学校教育における身体の規律化、訓練化というのは、国家の思惑の結晶するところであり、当時の「先端」の学問や思想を背景にして実践されてきたと言える。それを通じて、徹底的な身体管理を行い、伝統的な身体所作が失われ、近代的な身体を獲得する。そして、その「近代の身体化」を通じて、民衆の思考の様式も管理統制していくことになった。その結果、地域共同体の習俗や独自性が排除され、国家による社会の一元的な管理が進んだ。

あるいはまた、民衆が自ら近代化を求めていったという視点もある。もちろん何もない状態から内発的に近代的なものが民衆のうちに生まれたということではない。国家による近代化の推進の過程で、民衆側からそれを自発的に下支えするような意識が生まれてきたというものである。

しかし、両者の行き着くところは同じである。国家によって規律化されていっても、あるいは民衆自らが積極的に近代化を支えても、いずれも国家の管理-統制の中に包摂されるという意味では同じであろう。

むしろ、これらを否定するわけではない。しかし、翻って冒頭の問いに立ち戻ってみると、それだけでは私たちの生活に視点を据えた身体のあるべきを説明しきれているようには思えない。もっと微細に見ていくことによって立ち上がってくる身体というものがある。私たちの身体は、近代の流れの中に位置づいていくわけであるが、その過程はさまざまであるということなのだ。同調も無関心も包摂もせめぎ合いもある。無意識によるものもあれば、意識的なものもある。そして、近代化という枠では説明できないものもまた、残るのである。

本稿では、民衆の生活に視点を据え、いくつかの断面を切り出して行くことで、身体近代化に関する多様なありようを描出することを目的とする。したがって、取り扱う具体

的な対象はさまざまである。

まず、明治四〇年代から昭和初期にかけて台頭してくる坐や呼吸法を特色とする修養的健康法の中で、最も支持者を集めたものの一つである岡田式静坐法を取り上げて、創始者岡田虎二郎の生涯とその思想を考察する。また、愛好者たちの姿を通して、身体の近代化が推し進められていた当時に、なぜ、近代的な身体とは相容れない「坐」や「肚」が注目されたのか、人々はそれに何を求めていたのかを探り出すことを目指した。

次に、健康法と学校体育とを、各々が理想とする体型の比較を通じて、民衆の身体が葛藤をはらみつつも国家の身体へと包摂されていく過程を分析する。その際の一つの鍵になるのは、思考様式の変化である。身体と思考は不可分の関係にあり、思考様式の変容は身体を見る視座の変化を促し、また身体へのまなざしの変化が思考を変えていくのである。

さらに、明治末から昭和戦前期にかけての出版文化の発展を踏まえ、「健康雑誌」の読者たちが「科学」的知見に基づいた「健康」の言説をどのように受容し、身体化していったのかを探る。主な読者層としては都市の新中間層を想定し、彼らが「健康」の言説を呪縛されながらも、その一方でそれを積極的に求めていった理由を問う。

最後に、児童の養護と母性の教化を目的として設立された恩賜財団愛育会を事例にして、母子の身体へ向けての事業と民衆がそれをどのように受け入れていったのかを考察する。愛育会の実践とした、主に都市を中心に展開された「こども愛育展覧会」、村落を主たる対象とした「愛育村活動」を取り上げることで、本稿全体として、男性/女性、都市/農村という観点からの分析も可能となるように配慮している。